

平成 9 年度瀬戸内海東部海域赤潮広域共同調査（抄録）

酒井基介・高木俊祐・宮田 匠

本調査は、東部瀬戸内海の水塊構造と水塊の動き並びに *Chattonella* 栄養細胞の初期発生、増殖及びその他のプランクトンの動向について全体像を立体的に把握し、赤潮発生要因を明らかにするとともに赤潮発生予察技術の確立を図ることを目的として、平成 9 年 6 月 30 日～8 月 28 日の間、東部瀬戸内海関係 5 府県・水産庁及び民間機関と共同で実施した。

平成 9 年度における徳島県担当水域である播磨灘南東部での気象、海象及びプランクトンの出現動向について取りまとめたのでその概要を報告する。なお、詳細については「平成 9 年度赤潮対策技術開発試験（海域特性による赤潮被害防止技術開発試験）瀬戸内海東部海域赤潮広域共同調査報告書」を参照されたい。

1 気象

6 月 20 日に台風 7 号が四国の南海上を通過し、6 月 28 日には台風 8 号が瀬戸内海に沿って東北東に進んだ。台風通過後は 7 月上旬中頃まで太平洋高気圧に覆われて晴れたが、7 月上旬の終わりごろからは梅雨前線が中国地方に停滞したことにより、梅雨明けの 7 月 19 日までは雨の日が多かった。7 月 20 日以降は晴れの日となったが、7 月 26 日には台風 9 号が四国東部を北上した。8 月上旬中旬は大気の状態が不安定な日が多かった。8 月下旬は太平洋高気圧に覆われて晴れの日が続いた。

2 海象

6 月 28 日の台風 8 号の影響により鉛直混合が起こり、これによって底層水温は 20 以上に上昇した。1m 層水温は、7 月上旬～中旬の間は平年値より 1～2 高めで推移することが多かったが、7 月下旬～8 月中旬までは変動が大きく、平年値を下回ることも少なくなかった。塩分は 6 月下旬には全層で 32.5 前後であった。その後、底層塩分はなだらかに低下し、8 月下旬には 31.5 となった。1m 層塩分は、7 月中旬に急激に低下し沿岸域では 30 以下となったが、7 月下旬の内に 31 以上に回復し、8 月上旬～中旬の間には変動が大きかったが 30 以下となることはなく、8 月下旬の間は 30.8 前後で安定して推移した。

3 プランクトン

Chattonella は、6 月 30 日の第 1 回調査で 8cells/mℓ 検出され、香川県の調査では小豆島東岸で 200cells/mℓ 検出された。7 月 8 日には北灘町折野沿岸で局所的に薄い赤潮状態（328cells/mℓ）に達したが、7 月 14 日には 15cells/mℓ、7 月 17 日には数 cells/mℓ にまで減少し、7 月末には検出されなくなった。8 月中旬以降、再び 0.1cells/mℓ 以下の低密度で検出されたが、赤潮を形成することなく終息し

た。

本年は、平成元年以来の *Chattonella* 赤潮の発生となったが、漁業被害はなかった。